

試し読み版

常世送りの使者

奇譚

空蟬

表紙イラスト：秋月からす

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『妖猫奇譚 常世送りの使者』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



常世送りの使者

空蟬

表紙 / 秋月からす

# 登場人物紹介

---

## Characters

あやめ  
**彩萌**

飴屋の女主人。享楽主義者で日々是好日と暮らす。正体は齡二百を超える妖猫。

るり  
**瑠璃**

飴屋の居候少女。正体は幸せを運ぶ座敷童。

人の世に 恨みは尽きぬもの

恨み募りて妖となり 怨念渦巻く現世うつしよの

宵闇に舞う黒髪と 金色こんじきのまなこが見送りて

悪しき御魂みたまをいざなう顎門あぎと 常世とこよへの扉が開かれると云う――

時は太平。日々は怠惰に流れ、人々が墮落せし太平の世。今日も今日とてお天道様が陽をかざす。

「ふわあぁあ。退屈だねえ……ねえ瑠璃？」

腰元まで伸びる艶やかな黒髪を編みもせず背に滑らせ、故意に着崩した和装から白く透き通った肩先と拳が埋まりそうなほど深い胸谷を見せつけ。鮎屋の女主人・彩萌は陽の差し込まぬ番台に居座り、今日も平常通り客の来ぬ退屈さに艶めかしいあくびを噛み殺していた。

「ねえ。瑠璃つてばあ。何してるのさ」

気まぐれな猫を思わせる妙齡の美貌の中心で、黄金色の虹彩が瞬く。

「……ひなたぼっこ」

切れ長の視線を向かわせた先には、番台の奥の小窓をじっと見つめる、おかつぱ髪髪のき少女。名を、瑠璃という。

親子ほども歳の離れた二人に、血の繋がりは無い。宵街をあてもなくふらついていた瑠璃を、いつだったか彩萌が拾った。以後、こうして不思議な共同生活を送っている。

「日向ぼっこつて、そんな小窓からじゃろくに陽も差し込みやしないじゃないか」

事実、番台に座る彩萌の浅葱色の着物はもちろん、離れて座る瑠璃の白すぎるほど白い肌色にも、着込んだ彩萌手作りの菊模様の着物にも、少しの光も届いてはいなかった。

それでも少女は言葉少なに、手にした紙風船でお手玉をしながら、虚空を見つめるように視線を泳がせている。彼女の瞳は名の通り、透き通った、何もかもを見透かすかのような瑠璃色をしていた。

「ふうー。ま、あんたが楽しいならそれでいいやね」

静かで手のかからぬことに、気楽さと若干の寂しさを覚えつつ。再度店の入り口に視線を戻したところで、お客が来るはずもない。日当たりの悪い場末の立地に加え、そもそも飴屋だと分かるような看板やのぼり一つ、掲げてはいないのだ。

ただ怠惰な時間が過ぎ行くのを、薄暗い店内で待ち続ける。釣り銭入れの上に置いておいたキセルを紅に飾られた唇に啜え吹かせば、遠巻きに、けれど露骨に瑠璃が嫌な顔をして奥の部屋へと逃げていく。

「あははっ。おーい、黒飴あげるから戻つといでよ瑠璃い」

そう一声かければ、戸の陰から覗いている少女がぱたぱたと戻ってくるのを彩萌は十二

分に知っている。もう、随分と永い間共にあるのだから。

「……ん」

「あいよ。ゆつくりお舐め」

一服だけ吹かしたキセルを置いて案の定戻ってきたおかつぱ頭に手を乗せ、ひとしきり撫でてから小さな手のひらに売り物の黒飴を一粒乗せてやる。彩萌も、瑠璃も、総じてその程度の食事で数日は事足りる。「人」ではない一人だからこそ、享樂で始めた店の稼ぎがなけなしであろうと生きていけた。

「……美味いかい、瑠璃？」

「……ん。あむ……」

小さくうなずいた子■の髪を手櫛で梳かしてやりながら、彩萌はお手製の飴がコロコロと鳴る音に聞き入る。そうしていると、なんだか店番などしているのが馬鹿らしい気分になつてきてしまうと、知っているのに。ゆつくりと咀嚼する瑠璃の口内で、わずかに唾液の音が混じつて響く飴の音に、二人はじつと聞き入った。

「どうせ客も来ないし、閉めちまおつかねえ」

足袋の中の足指を丸め、狭い番台で腕と背中を反らせて伸びをする。空いた膝を目ざとく見つけ、すり寄つた瑠璃がころりと頭を寝かせてきた。

「……幾つになつても■なんだからねえ。羨ましいやら手がかかるやら」

口を突いた言葉とは逆に、嬉しくて仕方ないのを気取られぬよう必死に我慢する。着物越しの膝に触れた柔らかな黒髪感触にまどろみながら窓の外を見れば、ぽつぽつと小雨が降り始めていた。たしか、初めて瑠璃と出会った日も、同じように傘を差すかどうか迷うほど儂げな小雨が降っていた。

出会いから二十年。いや、もう三十年は経つただろうか。出会った日から瑠璃は変わらぬ姿で傍らにあり、彩萌もまた艶めいた美貌を失うことはない。

(ほんと、妬けるくらい白い肌だねえ……)

黒髪に隠れた「耳」が、ピクピクとくねっては甘いひと時にまどろむ。

「んっ……あ……」

そつと白く透き通ったうなじを撫で上げれば、くすぐったげに女が背を丸める。それはまるで、膝の上に乗った子猫のようだ。

出会ったあの日。一目見て、自分と同じだと感じたのだ。人ならざる存在——あやかし妖。

『一緒に来るかい、お嬢ちゃん』

たった一言。そう告げて差し出した番傘の中へ楚々と入ってきた少女の瞳は、やはり虚空を見つめて瑠璃色に煌めいていた。

『ねこ……』

『ん。ああ、あたしは猫だ。猫の妖さ』



9

内情を見透かされることに、不思議と嫌悪は抱かなかつた。きつと、一人きりでいることに疲れていたからだ、今にして思えば納得できる。

齡十を越えた猫は妖氣を持ち、その強さによつては人に化けることすら覚える。彩萌はすでに齡十を超え、永い間、人の世で人に化けて生きてきた猫又だつた。

かつての主人への思慕から人になりたいと願ひ、そうして得た妖力のおかげで人の醜さ哀しさを嫌というほど見つめてきた。なんとなく人の世に飽き飽きとしてきてしまつて、そんな頃に出会つたのが瑠璃だつたのだ。

「こちよこちよこちよーつと。にひひ」

「ん、んう……んー」

膝上で寝返りながら、むずがる姿が子猫のように愛らしくとも、瑠璃は猫又ではない。身の上も知れず、たつた一人雨の宵街をさ迷い歩いていた少女。この子の正体は何なのだと、不思議に思うことはある。だがそれは聞かずとも支障のない、瑣末なことだ。少なくとも、瑠璃とこうして日常を暮らしていく上では。

「ねんねんころりや……おころおりや……」

膝を軽く揺すつてあやしてやれば、じきに■子は眠りにつく。いつの間にも雨は上がり、小窓から差し込むわずかな光は夕暮れの橙色に染まっている。枯葉のにおいが過敏な猫又の鼻筋をかすめて掻き消えていく。瑠璃が眠れば、布団を敷き、寄り添うようにして早々

て互いの身を慰めあつてから会いにゆくこと。それが、二人で取り決めた約束だった。

「ほら、力抜いて。お姉さんに任せなさい……はぷっ！」

浅く胸先に歯を立てれば、びくりと可愛らしくうなじが震えた。さらさらとした前髪を梳いてやりながら、ゆつくりと、繰り返し唇を食む。甘い体臭に鼻腔が酔う。肉づきが薄く、けれどどこまでも柔らかい感触に、彩萌は天井知らずに興奮していた。

この時。こうして瑠璃と睦みあう時だけは、かつて唯一愛した男に抱かれていた頃のように、純然な切なさや愛しさに包まれていられる。

「う、あ……！！ あや、め……」

「あんツ！ こおら、がつつかない、んっ、ああはあ……」

合間に、自分の白襦袢をはだけることも忘れない。ふくよかに盛り上がる乳谷がまるび出ると、すぐさま瑠璃の紅葉のような手のひらが吸いついてくる。互いに横向きで抱きあう姿勢。肢体を突き抜ける甘い痺れに、それぞれの黒髪がばさりと敷き布団の上で躍った。ぎゅっとなんかにして、小さな肢体を抱けば、ぬくもりと愛しさばかりが膨れ上がる。情欲に押し流され、貪るのとは違う。柔らかく慈しむような静かで心地良い快感が、小さな手のひらに握られた胸に、うねりながら、子の腰に絡みついた股間に充足する。

これから、危険と隣合わせで妖に会いに行くのだ。妖のほとんどは現世に恨みを残し、怨念に覆われた魂魄が形を成したものだ。人に仇なすそれらを狩るのが、人の世に住みつき

暮らす彩萌の眞の生業だった。

主人と慕い、愛した男が生きたこの世を守ると決めた、百年以上も前の誓いを妖艶なる美貌の主は今も頑なに守り抜いている。

凶暴な妖相手に深手を負ったこともある。今度こそ、生きては戻ってこれられないかもしれない。だからこそ、こうして今生の別れがいつ訪れてもよいように、互いのぬくもりと存在を確かめあう。

「瑠璃、んあんっ……あんたは無理して一緒にこなくても……んあつくううんんっ！」

——きゅっ、きゅきゅうッ！

氣遣ったつもりが、瑠璃にしてみればのけ者にされたと映ったのだろう。反論の代わりに二つのふくよかな乳鞆が少女の手のひらで目一杯押し潰された。甘くもどかしく感じていた刺激が、たちまちのうちに電撃のように鋭い衝動へとすり替わる。

「いっしょに、いく……」

「んくア……わ、わかった、あん！ ごめんよ、瑠璃。あんたとあたしはずつと一緒、おあああんっ！ ご、ごめんって、あひィッ！」

乱暴に捏ねくられた乳肉を突きあがる電撃に悶えさせられながら、ぐずる子の頭を優しく撫でた。そっけないようにでいて、その実誰よりも愛情に貪欲な小さな娘。彩萌にとつて妹であり、娘のようでもあり、共に暮らす家族で、ただ一人の心許せる友人でもある瑠

璃への愛しさが、また跳ね上がる。

激しくなる鼓動に合わせて、白くたわわな巨乳が弾む。張りつく小さな手のひらに進んで吸いつくように、汗ばんだ乳肌がしつとりと艶を増していった。

もじつく股下も、すでに甘い蜜をこぼして濡れている。湿った黒い茂みが逆巻き、ひくひくと蠢く肉の唇を彩る。抜け目のない■子の腰は、まるで頬でもすり寄せるかのように互いの股間を密着させ、擦り合わせてきた。

——ずりイッ、ずり、ずりゆりゆうつ……。

「んはあああんん……じよう、ずだよ、瑠璃いいつ……」

大人しく儂い見かけと正反対の激しく、情熱的な腰の蠢きにじきに甘い蜜があふれ出す。「んっ、んっ、んうんん……っあはっ……」

混ざり絡まる黒髪が互いの頬を撫でるくすぐったさに、火照った瑠璃の表情が切なく潤んだ。それでも腰の動きを止めようとしれないじらしさに胸奥がきゅうつと切なく詰まる。漏れ出た蜜がほぐれた自分の肉ピラと、まだ硬さの残る幼い肉唇を湿らせ、ぐちゅぐちゅと、泡立つ卑猥な音を聞き。突き抜ける痺れに身を任せながら。

(ああ、すごい、濡れてる……瑠璃、瑠璃いいつ……)

張り詰めた胸の切なさに耐えきれず、ちょうど乳谷の手前にあつたおかつぱ頭をぎゅつときつく抱き締める。熱い吐息にほだされて、火照り悶えていた乳肌はますます淫靡な熱

と艶めいた香りを振り撒いていった。

「あむ……ちゅっ、ちゅずちゅっ！」

「くあんッ！ こ、こら、そんなに先っぽおっ……ひいいんッ」

二つの肢体がもじつづくのに合わせ、衣擦れの音が布団の上で響く。すでに彩萌は襦袢を肩までだけは、じつとりと汗を帯びた肌に黒髪を張りつかせている。瑠璃の方も揃いの白襦袢を腰の辺りまで下げて絡ませ、ほつれた黒髪を頬に遊ばせて、じつと潤んだ瞳を差し向けていた。その、い見かけと不釣り合いな艶めかしさに、どきりと胸が高鳴る。同時に、はだけた襦袢から覗く熟れた牝器官から、濃密な蜜汁がどろりと噴きこぼれた。

吸いつかれ、引き伸ばされた乳頭から、切なさがしぶき上がる。子を孕んだことのない乳房から母乳が出るはずもないのに、激しく吸われ続けて膨れた乳頭全体がジンジンと疼く。肩を滑り落ち乳肉の下敷きとなった白い襦袢と、火照り桜色に染まる乳鞠との対比が、い少女の欲求をますます高じさせていく。そのことを彩萌は、乳谷に吹きかかる吐息の熱っぽさで知った。

「ほんつと、だねえ、っひあんッ！ お、おっぱいばかり責めるなんてさ、んくっ！  
ほ、ほらあ……コッチの方もおおっ！」

くちゅっ、くちゅっ……。

重なった肉唇同士が粘液の摩擦でより密着し、絡みあう。つるりとした子の膣肉は滑

りがよく、熟れた猫妖怪の股間を磨くように摩擦する。

「あはあつ、瑠璃のあそこ、すべすべでイイわああ……」

一方、蕩けた彩萌の肉ビラはしきりに瑠璃の閉じた割れ目を扱といて、目覚めを促すかのように肉唇全体で粘っこい接吻を浴びせていた。

「んふううんんっ……やつ、あやつひううんん……」

いつしかカクカクと、拙いながら■子の腰が蠢きだし、熟れた女の腰使いと同調する。彩萌の腰が引けば追隨するかのように追いつがり、反動で押しつけられた腰肉を離すまいとなつて受け止める。ぼたぼたと漏れた蜜は、彩萌のものであつたのか、それとも――。尻の下に敷いた襦袢には、黒く濡れた染みが転々と刻まれていった。

「ヒクヒクしてるよ、瑠璃い……？ 果てたいときに果ててい、んッ！ からね……あはああああ！」

小さな■子の肩を両手で抱き締め、細く淫らな腰を両脚で絡め取る。陰唇のパクつきが激しく間隔を狭めるほどに、愛しさが胸を突いた。コリコリと、膨れた淫豆が、濡れて滑る瑠璃の恥丘で擦れて、切なく痺れる。未発達な■女の膺の上部でも、もじもじと皮を被つた肉豆がぼつちりと浮き出、教え込まれた快樂に悶もえている――。

「あふ、ふう、ふうう……あやつ、めええ……！」

おかつ髪を振り乱し、甘くふやけた吐息の音色が変わつた。一段高く跳ね上がり、一

層蕩けきつて涙混じりの甘い響きを届けてくる。淫蕩に溺れてゆく。ぴつちりと閉じていた発育途上の膣口が、濡れ、ほぐされてゆつくりと粘つく糸を引いて開いていく。

——くりゅッ、くりゅりゅうッ！

「んあはああつ、つくふう！ 瑠璃いつ、一緒に……！」

「んっ……いつ、しょ、あひっ！ あつああああ！」

擦れあつた淫豆がズクズクと甘い疼きを互いの股間に流し込んだ。一瞬飛び跳ねた二つの腰が、さらなる喜悦を求めるように再び重なり擦りあう。時に強く、時にもどかしさを煽るように切ないくねり様で。

はだけた襦袢がしきりに衣擦れの音で、妖しい夜の雰囲気盛り立てた。絡みあつた黒髪が汗で濡れ光り、交わつた黄金と瑠璃色の虹彩が抱擁を要求してどちらからともなく揺らいだ。——求めあうがままに唇を重ねる。

「んちゅっ、あふあつ、ああ、瑠璃ィ……！」

——ずりッ、ずりりィィッ！

「あひアア！ ああ……つひ！ うんうう……！」

激しく擦れあつた股座の痺れに、あるいは摩擦で泡立ちぐちゅぐちゅと奏でられた水音に恥じ入って。あどけない表情に羞恥の紅と、さらに不釣合いな艶が色濃く差し込んで、  
 ■貌に歪に淫らな華が咲く。

こじ開けたねじれた肉端が己が形を刻みつけるかのように粘膜を押し拡げ、怒涛の勢いで埋没してくる。

一撃で女の中心を貫かれ、灼熱に炙られた視界が白一色に灼けた。砕け落ちかけた腰が、尾を引かれ無理矢理持ち上げられる。圧迫に息が詰まり、脳裏が霞む。えずきにも似た声が、少量のよだれと一緒に吐き出され、恥辱にまみれた心が悲鳴を上げた。

「おふうっ……こりやあ、すげえっ……」

牡の感極まった鼻息が首筋をかすめ、ぴたりと覆い被さってきた異形の体温を着物越しに強制的に感じさせられる。昂る鼓動を聞かされ、同調して股下がズクズクと疼き狂った。膨張する牡肉が、ゴリゴリとぬめる粘膜を押し拡げる。拡張されてなお、鬚は牡に媚びるかのように貪欲にすがりついた。

（ち、くしょお……女の身体ってえのは、つくづく、な、情けない、んあッ！　ほう、うんんんう！）

きつく噛んだ唇から、また紅の雫が垂れこぼれる。声を漏らさぬよう噛み締めた鉄の味が、悔しさをよけい増幅させて胸奥で渦巻く。のしかかる牡の体温を疎ましく思いながら覗き見た背後で、悲痛に歪む瑠璃色の瞳と目が合った。

「泣かないでくれよ、る……りイイイあああ!!」

——さわさわっ……。



氣遣いの言葉を漏らしかけたその時を狙い、ごつい手のひらがピンと反り立つ猫耳をなぞるように撫で上げる。裏筋に集中したむず痒い刺激にぞわぞわと悪寒が湧き、次いで望まぬ愉悅が下半身を駆け上る。悔しさに噛んだ唇が悦楽で自然と開かれ、切なさに溺れた嬌声が吐き漏れていった。

「ひひっ、まぐわいの最中に余所見たあ、随分と余裕だな、ああ？ふうっ……」

逆巻く縮れ毛を湿らせなおも股下にあふれた蜜汁は、黒留袖の裾により黒々としたシミを刻みつけ、すでに汗で湿った襦袢にも牝の臭みをすり込む。内腿を伝い降りた液は草履にまで甘い匂いを染みつけてゆく。

「んひアッ!? やあ、耳に息かけるなっ! つくひいああ……!」

吹きかかる吐息のネットリとしたいやらしさに、膝が笑う。足袋の内では嫌な汗がにじみ、滴る愛蜜と混じり、ふとした拍子にも滑って草履が脱げそうになる。踏ん張るほどに、もどかしさは増して股間から真新しい蜜を染み出させてしまう。

ヒクヒクと蠢く耳朵を、粘つく舌で舐め上げられた。疼きに乗じて股座の奥で、濡れた鬘が牡肉へと絡み、性を欲して蠕動する。

「ぢゆるう……ひひ、突いてやる、突き壊してやるぞオ淫売がアア!」

——ぢゅぽおおおッ! ぐぼっ! ぽぢゅんッ! ぢゅごっぢゅぶぢゅぢゅ!

「くひいやあああああ! はっはげしいひいやあああはああ!」

鋭く突き刺さる肉勃起の丸みを帯びた硬い先端に押し叩かれ、しきりに子袋が浮き上がり、また下がっては小突かれる。ズポズポと卑猥な粘着音が、繋がる股間同士の隙間から漏れる蜜と共に響く、搔き回され泡立つ蜜汁は粘つきを増して、内腿や夜風に舞う襦袢へとこびりついた。

「ああうっ……んはッ……いあ！ あひ、イ……尻尾お！ んオ！ お、奥うう！」

逃れようと腰を引くたびに、伸びきった尾がさらに引つ張られ、ちぎれそうな鋭い痛みと共に耐えがたい肉悦楽を股座に響かせる。引き寄せられて小突き上げられた子を孕む袋が、絶えず振動に襲われては歪にたわみ、快楽漬けにされてゆく。押しつけられた硬い切っ先に叩かれるたび、子袋は悶え泣き、すがりつくように牡肉へと吸いついてしまう。

「そうか、奥が好きか！ 奥を逸物で擦られるのが好きか！ ひは！ ひはははは！」

——つぐりゆううううう！ ごりッ！ ずごんッ！ ごぢゅぶぢゅぢゅううッ！

「いぎイツ……かはっ……ッんん！ えぐ！ ふああああアアアア！」

息詰まった直後に、膨大な量の肉悦が雪崩れ込んだ。捻じ込まれた肉の楔の衝撃に抉れた粘膜が引き攣り、キュウキュウと牡の幹を締めつけてしまう。おかげでなおも浅ましく膨れた肉幹に押される形で、引き剥がれた肉襲の隙間を白く煮え立つ淫欲の塊がすり抜けていった。笑っていた膝が折れ曲がり、とうとう牡の手でつかまれた二本の尾だけで体重を支える羽目となる。

(いあ、ちぎれる、あたしの尻尾がもがれてしまおうう！)

残った一本の尾が、媚びるようにはたはたと左右になびいた。その様を見咎め、欲深な牝の魂魄は思いつくがまま新たな陵辱の企みを口走る。

「くふああ……おい、餓鬼！ てめえが余った尻尾を引くんだ……。大事なお姉ちゃんの股が突き壊されないように、尻尾つかんで目一杯手元に引き寄せてみろッ！」

やらねば、牝の股を突き壊すだけ。宵闇に煌めく黄金と紅に彩られた眼が、ただの脅しではないことを物語っていた。まだ、瑠璃はよろめきながら、瑠璃色の、涙を目一杯溜めた瞳を大開きに、ただ一人の家族を——彩萌の痴態に見入っている。■女の息を呑む音が、確かに聞こえた。また新たにつかまれた袖口から、彼女の震えが伝わる。

(あくう、ううう……瑠璃イイ……。あんたに辛い思いさせて、なのにあたしは、あたしはああっ……いひんッ！ んオオオオオ……！)

瑠璃の瞳は悲しみに彩られ、伏目がちに瞬いていた。なのに、そこに貪欲にギラつく淫蕩な牝の色を嗅ぎ取ってしまう己が恨めしい。わずかな■子の表情の変化——微妙にたわむ眉や、瞬きの間隔、そうしたものからでも彼女の深層を探れてしまうことが、皮肉にも熟れた身から止め処なく淫欲をほじくり出してゆく。

「瑠璃、あ、あたしなら……心配ない、からあッ！ はひいつ、いい……だから、遠慮しなくて、いいからああッ！」

嘘だった。本当は、ただ乱暴に、一番の性感帯を引かれたかっただけ。瑠璃に逃走を指示するよりも先に、己が欲熱を煽って欲しいとねだってしまった——。深い後悔と、底知れぬ期待とが半々に、膨れた肉鞠の底で煮えたぎる。

池から吹き上がる夜風の冷たさが、時折前髪を撫でて火照った思考を醒まさせる。そのことがかえって辛く、醒めるほどにより苛烈にのしかかるぶり返し of 快樂への恐怖が増してゆく。後悔と期待とがない混ぜに、煽るだけ煽られて増幅し続ける。

「……よ」

「ひう！ い、今なん、て……？」

消え入りそうな、声だった。うなじにかかる牡の吐息に喘がされ、霞んでしまうほどの。だが、確実に瑠璃の唇が、意思のこもった言葉を告げた。額より滴る鮮血を舐め取り、溜めた涙を振り払い。■子は改めて意思を告げる。

「いい、よ……あやめがしてほしいなら」

——きゅうッ……！ 異形の脇で佇んでいた小さな手のひらに、ためらうことなく、闇夜に揺らめく白い尾を引き寄せられた。

「あひああ……！ か、感じるようっ、瑠璃のぬくもり、感じるううう！」

恥辱に咽んでいた心にはあつと甘い痺れが拡散する。同時に、カチカチとぶつかりながら擦れる両膝の真上で、栓を失ったかのように蜜がだだ漏れた。

「ぬふウツ、すげえ！ ヌルヌルして魔羅が溶けちまいそうだああ！」

牡の雄叫びが夜の静寂を引き裂いてこだまする。水面が波打ち、何度も咆哮と艶めかしい粘着音とが反響しては絡まりあう。

あふれ返る充足を、喜悅に跳ねた身体が無理矢理に心へと刻み込む。いつしか蹂躪に耐えていたはずの腰は勝手に悶え、くねり、喘ぎながら肉悦を貪り食らっていく。

「んひッ、ああいッ！ 奥、もつとお奥に欲しいのおお！」

——じゅぽぶッぶぢゅぢゅ！ ごぼっ……びゅぶぢゅぶぶッ！

折角の揃いの衣装にシミが刻まれることも厭わず、掻き回すように腰を振っては悶え狂う。視線は背後で尾をつかむ■い相棒に釘づけに、股間の意識は孕み穴の底まで突き入った肉の楔へと集中した。

深々と抉られ泣き狂わされる女陰も、尾からの痺れを受け取ってヒクつく肛門も。唇からはよだれがこぼれ、黄金色の瞳は潤み、猫耳を舐めしゃぶられて、より高みに達する。

「ひはあああ！ 耳いやああっ耳はダメなのおおお！」

悶え振りたくった尻の谷間で、甘さの混じる悲鳴に興奮して牡肉がさらに膨張した。コツコツと叩かれる子袋がまた夜泣きする。欲深な唇で牡の切っ先へと吸いつき、漏れ出る先走りをチュウチュウと吸り。薬に溺れた中毒患者のように、牡の体液への欲求は止まらなくなつた。

（む、胸が切ないイイ……掻いて！ 誰か爪を立てて引つ掻いとくれよおおおッ！）  
 女陰も尻穴も、耳裏や尾までが喜びに溺れさせられる中。触れてもくれぬまま放置された胸の先端が、切なく疼いてツンと尖る。ほどけかけた衣装の袖からたつぷりの重量を持った肉鞠が覗く。

張り詰め、汗に浮いた鞠はより肉感を増して、牡の目を愉しませてしまう。ほどけた衣装はこもっていた熱気を逃がし、わずかな摩擦快楽さえも乳首から奪っていつてしまった。痛いほどの男の熱視線を、汗の溜まる谷間や充血して赤く色づいた突端にひしひしと感じる。それだけに、接触すらないことがもどかしく、堪らぬ焦らしとなって熟れた肢体を苛んでいった。

「どしたあ。痒いのかあ胸が！ みつともなく腰と乳をゆさゆさと揺すつてよオ！」  
 理由を知っている癖に。あえて乳だけ触らず牝の反応を愉しんでいた牡が、ニタニタと下卑た笑みを携えて訊ねてきた。腕が自由になれば平手打ちの一つも食らわせてやったかもしれない。だが腕はだらしなく快楽の只中で痙攣し、脚は笑う膝を押さえるので手一杯だった。

（情けないよ、あたしは……気持ちいいことに、逆らえない……なんてえええ！）  
 心が墮ちるにつれて自然と眉が八の字に折れ曲がる。夜風の冷たさも、闇夜の静けさも敵わぬほどに昂りが噴き出し、とうとう喘ぎを止めることができなくなる。

——ぢゅごづぶうううう！ ごづんッ！ づぼおッ！ ぱぢゅんッぱぢゅぶッ！

「んひあおとおおお〜〜！ あおつ、おとお！ 奥うっ、そこがいいっ、いいのオオ！」

ようやく弾けた牝の嬌声に、牡の肉勃起がブグリと胎内で膨れた。ドクドクと鼓動を響かせる幹で発した熱を熟れた胎内の粘膜に馴染ませ、切っ先から噴いた我慢汁を待ちわびる子袋の入り口にすり込む。掻き混ぜるようにくねる二つの腰使いがやがてぴたりと合致するようになり、胎内で牝牝の体液が混ざり込んで染み渡っていく。

——きゅうっ！

「ひぐううう！」

切ない刺激に思わず振り向けば、懇願するような瑠璃色の瞳が、溜まり込んだ涙で揺らめいていた。ドズドズと突き入る牡肉の衝撃に、次第に瑠璃の表情が霞み、ぼやけていく。閉じることを忘れた唇から、噛み締めた血と甘い声音を漏らし。

「んはあおつ、はひい！ ごめ、んっ！ 瑠璃イツごめんねえええ！ も、もお堪えられないイイイイ！」

艶混じりの謝罪に、子がどう反応したのか、潤んだ視界では確認することができなかつた。パンパンに詰まった肉悦の重みで垂れ下がる乳先が、刺激を求めて啼きわめく。抑圧され続けた塊のせり上がりに、下腹が小刻みな痙攣を繰り返す。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**